2021年3月24日発行（通算第536号）

世界情勢ブリーフィング
https://guccipost.co.jp/blog/jd/

■ 米中外相会談で厳しい応酬　バイデン米政権になって初の米中高官級協議（3月19日付BBC）
https://www.bbc.com/japanese/56452629
■ Secretary Antony J. Blinken and National Security Advisor Jake Sullivan Statements to the Press（3月19日付国務省）
https://www.state.gov/secretary-antony-j-blinken-and-national-security-advisor-jake-sullivan-statements-to-the-press/
■ 欧米、中国に制裁を発動　ウイグル族への「人権侵害」で（3月23日付BBC）
https://www.bbc.com/japanese/56492491

アンカレジでの米中外相級会談、少し時間が経ってしまいましたが、今後の展望を中心に解説します（冒頭のやりとりを含めた会議の概要については前回の記事を参照下さい）。

・「米中外相級会談」（3/22）
　https://guccipost.co.jp/blog/jd/?p=9184

解説が遅れているうちに、米・EU・英・カナダが足並みをそろえてウイグル制裁に踏み切ってしまいました。こちらも踏まえてコメントします。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
米中外相級会談
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

●米中の「激突」

まず、メディアの前での1時間にわたる非難合戦について。これにはビックリしました。過去の政権はもちろん、トランプ政権のときにも見たことがない光景です。

というよりも、トランプ政権のときは、トランプ大統領やポンペオ国務長官は、ツイッターや記者会見など、相手がいないときには言いたい放題でしたが、実際の会談になると、意外に礼儀正しく、中国側も淡々と対応して、静かに終わっていました。だからこそ、トランプとポンペオの挑発的な言動は選挙向けのポーズであり、それを中国も見透かしているな・・という印象を与えていました。

それに比べると、バイデン大統領、ブリンケン、サリバンらは、普段の言動も、今回の会談の発言も、言葉遣いは丁寧です。しかし、その内容や言葉以外のアクションは、実はかなり挑発的な面がありました。

まず、会談のアレンジが特徴的でした。米国としては、まずは同盟国である日韓に会う、今の段階で中国に行く必要はないので立ち寄らない、しかし中国が望むなら給油地のアラスカで会ってやっても良い・・というかたちです。中国は国内向けには、アンカレジは米中の中間点だ、招待されたから行くんだ、「戦略対話」なんだ・・とアピールしていましたが、言えば言うほど必死さが出てしまうように見えました。

そして、会談前に、米国は立て続けにパンチを繰り出しました。香港自治法に基づく追加制裁、ファーウェイへの輸出規制の強化、FCCによる中国聯合網絡通信（チャイナ・ユニコム）の事業免許の取消手続きの開始、

商務省によるサプライチェーン・レビューのための中国のIT企業への召喚状の発出・・いずれも、実体的な影響はほとんどないのですが、何もこのタイミングでやることはないだろう、という措置です。影響がないだけに、逆にわざとタイミングをあわせたのだろうとも感じさせます。

さらに、日米豪印（クアッド）と日韓での2＋2という流れがあり、実際の会談になると、ブリンケンは、言葉は丁寧ながら、ウイグル、香港、台湾、サイバー攻撃、同盟国への経済的威圧の問題という、中国の「核心的利益」に触れる問題に一気に踏み込んできました。

もともと中国としては、バイデン新政権が発足したことで関係を「リセット」したいと考えており、今回の会談をその一歩にすることを狙っていたはずです。そうした姿勢は、バイデンと習近平国家主席の電話会談のときからあらわれていました。

・「米中首脳電話会談」（2/15）
https://guccipost.co.jp/blog/jd/?p=9085

ところが、先に述べたような米側の一連の対応を見て、「これは無理だ」と悟ったのでしょう。そして、そうであれば、むしろ「こっちも一発かましてやろう」、それによって国内向けにアピールした方が良い・・というモードに切り替わったのだろうと思います。

いったんそうなると、あとはどれだけ演出できるか、これは「役者」である楊潔チと王毅の腕の見せどころになります。それが、あのわざとらしいほど大げさな合計20分の米国を非難する演説になったわけです。

会談後、中国メディアは、1901年の義和団事件後の北京議定書の締結の場面と並べて、「120年前の屈辱をそそいだ」と報じました。また、「米国に中国の内政に介入する資格はない」という標語のような言葉が生まれ、Tシャツやステッカーにプリントされました。すべて当局が準備していたものでしょう。
https://twitter.com/JDWorldBriefing/status/1373217172781101062

楊潔チと王毅は、「米国に物申した」英雄として称えられていますが、中国共産党幹部も、「良いパフォーマンスだった」と評価していると考えられます。上司の期待にこたえた楊潔チこそ「最大の勝者」といわれる所以です。

また、第三国へのアピールという意味もあったはずです。今回のパフォーマンスを外国メディアが取り上げることは当然わかっていたことであり、中国外交部も積極的に発信していました。

しかし、中国以外の国で支持が得られるわけがありません。「戦狼外交」と同じで、反発を呼ぶだけです。このあたりはいかにも中国らしい、「内向き目線のパブリック・ディプロマシー」です。

一方、米国がこうした中国の対応をどこまで予見できたかは謎です。事前の挑発的な措置から、こうした対応をむしろ引き出そうとしていたとの見方もあるようですが、えんえんと中国から叱責される場面をメディアの前に見せることをブリンケンらが得策と考えるとは思えません。

おそらくブリンケンらは、かなり驚いたのだろうと思います。そして、このまま一方的にやられる絵を残すのはマズイと思い、メディアを残して、反論に踏み切ったのでしょう。

特にテッド・クルーズをはじめとする共和党議員は、「バイデン政権の対中外交は甘い」という批判を展開しているので、このような光景は「失態」として責める口実になります。ブリンケンの対応について、バイデンは「非常に誇りに思う」と述べていますが、これはダメージコントロールをうまくやった、という評価のようにも聞こえます。

また、同盟国に対するイメージに配慮した、という面もあったはずです。ブリンケンは、「同盟国と会ってきたばかりだ」「あなたたち（中国）の言い分は同盟国から聞いていることと異なる」と同盟国との連携を繰り返し強調しています。

これは、「トランプ政権とは違って、バイデン政権は他の国々と一緒にやる」という姿勢のアピールですが、そのメッセージは、中国のみならず、他でもない同盟国に対しても向けられていたものです。以下の記事でも述べたとおり、日本を含む同盟国にとっては「頼もしい」反面、「覚悟」を求められるものでもあります。

・「日米・米韓『2＋2』」（3/22）
https://guccipost.co.jp/blog/jd/?p=9184

●会談の成果

というわけで、アラスカ会談は、双方とも、国内と第三国に対して、自らの力と正当性を誇示する場になり、それで終わりました。とはいえ、それは最初から想定されていたことでした。

まず双方に経済閣僚がいないので、中国にとって最大の懸案である輸出規制や関税については、もともと進展は期待できませんでした。あくまでも顔見せ、少しでも融和モードを作ることができれば（中国にとっては）意味があるという程度の話だったので、がっかり感はありません。

また、冒頭発言後の協議は理性的に行われたと伝えられています。冒頭発言すら、実際のところ、前回の記事で述べたとおり、楊潔チが大演説をした後、通訳に「テストだな」と呼びかけ、ブリンケンは「通訳の給料を上げないと（笑）」と述べるなど、お互いに「歌舞伎」であることは分かっている雰囲気でした。

とりあえず、米中双方にとって、対話のチャンネルが維持されていることが確認できた、ということが「成果」だったといえます。中国も、これだけ「対決」のムードを作りながら、会談後は、「交流が再開され、継続されることに意義がある」と発表しています。双方が「競争」の状況にあることを認識した上で、「率直な対話」を始めるために必要なプロセスだったともいえます。

とはいえ、今回の会談から見えてくるものとしては、米中協力が進展することは、少なくとも当面は想定できない、ということです。バイデン政権は、対中政策のレビュー段階なので、そもそも動けないのですが、さらに、国内事情の制約が強いため、協調的な態度を示すことが難しい状況にあります。

そうすると、中国も、冒頭発言のような「茶番」で国内向けアピールをするしかない（その方が得策）という考えになります。また、米中双方とも、この状況下では、まず第三国への影響力を高めよう、という方向に傾きます。

そうした中で、冒頭述べたとおり、ウイグルの人権侵害をめぐって、米国とEU、英国、カナダが連携して制裁に踏み切るという事態になりました。中国は当然ながら猛烈に反発し、すかさずEU議会関係者ら10人を制裁対象として報復しています。これは、バイデン政権にしてみれば、包括的投資協定（CAI）（以下の記事参照）によって中国との関係を深めようとするEUを再び中国から引き剥がし、対中包囲網を作るという意味で外交的勝利といえます。

・「中・EUの包括的投資協定の大筋合意」（1/4）
https://guccipost.co.jp/blog/jd/?p=9013

しかし、米中の二国間交渉は、当然ながら進めにくくなります。ブリンケンは、イラン、北朝鮮、アフガニスタン、気候において米中の利益は交差していると述べており、これらの分野については、次項で述べますが、ある程度は協力に向けた対話が進む可能性はあります。しかし、少なくとも技術や貿易といった、中国が制裁の解除を求めている中核的分野については、おそらく本年中に進展は期待できないでしょう。

●今後の注目ポイント

米中関係が厳しい状況にあることに疑いはありません。そもそも米中対立は構造的なものになっているので、当然ともいえることです。とはいえ、バイデン政権が描いている中国との関係は「競争的共存」です。対決一

辺倒で終わることはありません。どこかで対話は始まるはずです。

まず、気候変動サミットが4月22日に予定されているので、そこまでにバイデン政権としては、できれば中国から何らかの協力を得たいと考えているはずです。この点については、ケリー気候変動問題担当特使がEU、カナダ、中国が主催する「気候行動に関する閣僚会合」（オンライン会議）に出席し、中国代表の解振華・気候変動問題特使とも会談する予定であることが発表されました。

ケリーと解振華の会談において、どれほど中国が前向きな姿勢を見せるかがまず鍵になります。ただ、米国の保守派の議員は、すでに気候変動において中国に譲歩することがないよう牽制しており、実質的な進展はすぐには期待できないと思います。

次にイランについては、最近、中国がイランからの石油輸入を急増させており、それが米国の制裁によるイランへの圧力を弱めている事情があります。米国は中国に制裁の厳格な履行を求めており、これに対して中国がどのような対応を見せるかが注目されます。

北朝鮮については、ちょうど昨日、金正恩と習近平が口頭のメッセージを交換し、連携を強化する姿勢をアピールしました。韓国の北朝鮮への対応への弱さもあり、今の時点で前向きな動きを期待できる状況にはないように思えます。

アフガンについては、トランプ政権が米軍撤退の期限を5月1日に設定しているので、中国からも協力を得たいと考えているようです。特に中国への依存を深めているパキスタンへの働きかけを期待しているのでしょうが、中国自身がどこまで影響力を行使できるのかという問題もあり、どこまで期待できるかは不透明です。

最後に、イーライ・ラトナー国防長官特別補佐官をヘッドにするタスクフォースがまとめている中国政策のレビューの結果は5月下旬に分かる見通しです。バイデン政権が本格的に動くのはこれ以降になります。経済チーム同士の交渉はここから始まるのでしょう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
あとがき
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

■ プーチン氏、シベリアで国防相と休暇 全地形対応車を自ら運転（3月22日付AFP）
https://www.afpbb.com/articles/-/3337979

プーチン大統領がショイグ国防相とともにシベリアで休暇を過ごす様子の写真がクレムリンのウェブサイトに掲載されました。何やら戦車のようなゴツイ車を運転していますが、「全地形対応車」だそうです。
https://twitter.com/dimsmirnov175/status/1373589075047878656

プーチンといえば、毎年恒例のカレンダーでも、半裸で馬に乗ったり、氷点下の気温で沐浴したり、マッチョなスタイルが強調されていましたが、最近は、今回の写真を見てもわかるとおり、落ち着いた格好と表情で渋さをアピールする路線にシフトしている印象を受けます。まあでも車から軽やかに出るところなど、会談でよろめくバイデン大統領とは違うぜ、というアピールにも見えますね。
https://twitter.com/dimsmirnov175/status/1373595474045890560

一方、中国を訪問していたラブロフ外相は、TikTok動画を外務省のツイッターに掲載していました。
https://twitter.com/JDWorldBriefing/status/1373967024292995072

しかし、風景と音楽は中国らしい叙情がありますが、本人は直立不動のまま。そのままでは芸がないと思ったのか、一瞬だけシュバァァという特殊効果が入りますが、これも意味がよく分かりません。

内容的には中国向けの広報のように見えますが、中国ではツイッターは使えないので、意味がありません。プーチンと比べると、いろいろな意味で何を意図しているのか分からない、不思議なパブリック・ディプロマシ

ーでした。

The Gucci Post（Copyright 2021 グッチーポスト株式会社）
■ Twitter　https://twitter.com/JDWorldBriefing
■ ブログ　https://guccipost.co.jp/blog/jd/
■ メール　jd.world.briefing@gmail.com
■ 編集部　inquire@guccipost.co.jp

※本メルマガの内容は、筆者の個人的な見解であり、他のいかなる個人の見解を代表ないし代理するものではなく、他の個人または組織がその内容に対して責任を負うことはありません。